

広仁会賞 第22回 今井 克彦

題名：Clinical Analysis of Results of a Simple Left Atrial Procedure for Chronic Atrial Fibrillation

(慢性心房細動に対する簡易左房手術の臨床成績の検討)

要旨：

背景と目的：我々は1993年より僧帽弁膜症合併慢性心房細動（AF）に対して、左房側のみの簡易術式（以下本術式）を行ってきた。これは、同じ慢性心房細動でも僧帽弁膜症を合併する場合は右房よりも左房に負荷がかかるため、両心房を迷路状に切開するメイズ手術の切開線に比べ左房側の少ない隔離線のみでAFを消失させることが出来るという概念に基づいた手術で、その初期成績は電気生理学的証明とともに報告した。今回、その長期成績について詳細に検討した。

方法：本術式を施行され、術後1年以上の追跡が行われている32例を対象とした。男性17例、平均年齢64歳で、平均9.3年のAF歴を有していた。手術は弁疾患置換または形成に加え、電気的隔離線として右側左房切開を4つの肺静脈口を隔離するように上下ともに延長し、左側左房部分は冷凍凝固（ -60°C 、2分）を行った。さらに、この隔離線と僧帽弁輪および左心耳口の間を冷凍凝固で隔離した。対象を最終追跡時点での調律によりAF（+）群（AFが残存するもの）とAF（-）群（AFが消失したもの）に分け、手術成績（合併症を含む）、術前術中背景因子について解析を行った（ $P<0.05$ ）。

結果：98.5人年の追跡範囲において、AFは74%で消失していた。AF消失に関与する因子としてAF歴のみが挙げられ、これが長いものでAFは消失しにくかった。AF（-）群では、5例21%で術後心房頻拍や心房粗動を認め、また、5例21%で洞不全などによるペースメーカーの埋め込みが施行された。心房機能を反映するA波は、僧帽弁で60%三尖弁で100%見られた。

考察と結語：本術式は遠隔期成績においても有用であり、また、心房機能の回復も認めた。ただし、AFが消失しても、AF以外の上室性不整脈の出現がいくつか見られ、消失率の向上とともに今後の術式の改良を行ってゆく必要がある。